

## サン・シモンの天才論

小林, 栄三郎

<https://doi.org/10.15017/2335141>

---

出版情報 : 史淵. 57, pp.65-83, 1953-06-05. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :



# サン・シモン<sup>1</sup>の天才論

小林 榮 三 郎

サン・シモン (Claude-Henri de Saint-Simon, 1760—1825) の歴史観については多くのひとびとによつて論ぜられたけれども、かれの天才論を特に考察したものは、わたくしの限られた参照範囲では、歐米にもまだ存在しないようである。史學理論史の一部として天才論史を研究しようとするわたくしの立場については他の機會に述べたので、ここでは繰りかえさないが、そうした天才論史の上にサン・シモンが占むる意義はすこぶる大きい。これは、オーギュスト・コントの天才論が非常に有名であるだけに、サン・シモンがコントに相當深い影響をおよぼした事實を想起すれば、容易に推測されるところであろう。また、さかのぼつてサン・シモンがコンドルセから受けた感化を併せ考へるならば、天才論の繼承と發展との興味ある關係が浮びあがるはずである。

およそ史學理論の一部としての天才論は、天才を社會發展の有力な動因と見なすものと、そうした動因としての天才を否定するものとに大別されるであろう。わたくしは前者を天才動因論、後者を天才非動因論と名づけたいと思う。そして近世における天才論の主流は、天才動因論から非動因論へと推移してきているといえよう。また天才動因論は主として個人主義的歴史観に立つひとびとによつて主張され、天才非動因論は集團主義的歴史観の立場をとるひとびとによつて唱えられた。しかし、思想史上のほとんどすべての現象と同じく、この場合においても天才動因論から非動因論へ、個人主

義的歴史觀から集團主義的なそれへの推移は、一舉に行われたものではない。その過渡的段階において、さまざまの組合せをもつて兩史觀・兩天才論の混合併存が見られる。したがつて十八世紀の天才論においてすでに、個人主義的歴史觀を完全に脱却しないままに天才の社會的被制約性を説き、天才非動因論の萌芽的形態を示したものがあつたと思へば、十九世紀においてもまだ、集團主義的歴史觀を是認しつつ社會發展の動因の一部として天才の創意を強調する論者もある。現にサン・シモンの天才論がいずれに屬するかを考える場合、われわれは簡單にそれを集團主義的歴史觀に立つところの天才非動因論に屬するとはいひ切れないように思う。そこには、なお詳細に検討すべき多くの問題が残されているであらう。

サン・シモンが自分の歴史觀を述べ、天才を論ずる場合に、集團主義と非動因論の立場をとつていと考えられることの多いことは事實である。しかし、時としてかれは自己の見解を創見として誇り、みずから一個の天才をもつて任ずるかのような風が見える。そうなると、その見解を或るひとが提唱しなくとも、いつかは他のひとによつて同じような見解が唱えらるべき必然性が存在していたのだ、という天才非動因論の基本的態度とは矛盾してくるように思われる。これは、ひとりサン・シモンばかりでなく、コントその他のひととにも多く見られる矛盾である。しかし、さらに重要な問題は、いかにしてサン・シモンがかれの天才論に到達しえたか、ということにあらう。かれが「社會主義とよりほかに名づけようのない一連の諸觀念」によつて勇氣づけられているといわれる場合、そうしたサン・シモンの「社會主義」はかれの天才論といかなる關係に立つか。このような「社會主義」をまたなければ、かれの天才論は生れえなかつたのであらうか。それはいわゆるブルジョワ・イデオロギーといかなる連關をもつか——こうした問題のすべてを解明しつくすことは到底わたくしの能くするところではなく、また参照すべき文献も入手しえなかつたものが多いので、所論の不備および誤謬をまぬかれえないであらう。御叱正をこいねがう次第である。

一八一九年から翌年にわたつて書かれたといわれる「組織者」(l'Organisateur)のなかで、サン・シモンは社會體制の變動と天才との關係について、つぎのように述べている。「相次ぐ新しき體制を組織すること (l'organisation successive de nouveau système) が學者や藝術家により、また工匠によつて行われ、しかもあらかじめ熟考された一つのプランを、十一世紀のかた現代まで變りない仕方で行うとすつた具合に行われた、などと考えるのは、確かに馬鹿げたことであろう。どんな時代にも、文化の完成は、そんな風にもくろまれたところの、そしてひとりの天才人 (un homme de génie) によつて前もつて考え出され大衆 (la masse) によつて採用されたところの進行 (une marche) に従つて行われたのではない。それどころか、そんなことは事物の本性上まづたく不可能である。なぜなら、人間精神のもろもろの進歩に關する一段と高次の法則 (la loi supérieure des progrès de l'esprit humain) が一切を引きずり支配してゐるのであつて、この法則にとつては人間は道具にほかならぬ (les hommes ne sont pour elle que des instruments) からである。なるほど、この力はわれわれから發する (cette force dérive de nous) ものではあるが、その力の影響力をまぬかれたり、あるいはその作用を制御 (maîtriser) することは、ちようどわが遊星をして太陽のまわりを廻らしむる本原的動力をわれわれの意のままに變更しようとするのと同じように、われわれの能力を超えている」と。ここでサン・シモンは、十一世紀のかたの社會體制の發展が天才的な個人によつて發案され計畫され、それに大衆が賛同することによつてなしとげられたのではなく、人間精神進歩の法則に従つて遂行されたものであることを強調してゐる。この法則は、今日のことばでいえば世界史の發展法則ともいうべきものであつて、それはあたかも遊星の運行を支配する法則と同じように、何びとも變改を企てえない絶對のものである。そして、その法則から見れば、個々の人間はその法則を實現す

るための道具であり器械である、というのである。

それでは人間はこの法則に盲目的に服従するにすぎないのか。サン・シモンは豫定説あるいは宿命論を信奉するのだろうか。「二次的な結果 (Les effets secondaires) だけがわれわれに依存する。われわれがなしうる一切のことは、その法則によつて盲目的に推し進められず、その法則がわれわれに規定する進行に精通して原因 (cause) をよく知り、その法則(われわれの本當の攝理)に従うことである。なお序でにいうと、現代のなすべき偉大なる哲學的完成は、まさしくこの點にある。」<sup>5</sup> こうしたサン・シモンのことばによつて考えると、人間精神進歩の大法則が存在し、この法則が貫徹されることだけは豫定されているし、その意味において進歩は人間の宿命であるということになる。しかし、かれは通常の意味における豫定説・宿命論の立場をとるものではない。この法則の存在そのものは人力によつていかんとも變更しえないものであり、それは文化發展・社會變動の鐵則にして、これに従うことは人類にとつて至上命令であるけれども、この法則によつて盲目的に押し流されることなく、因果の關係を探求することによつて無益の努力を排除し、効率的に文化の完成という人類終局の大目的に邁進しうる、とするのである。また「社會制度の改良に應用されたる生理學について」*De la physiologie (appliquée à l'amélioration des institutions sociales)* のなかに、サン・シモンは個人が社會という有機的機械におけるそれぞれの器官 (organe) にほかならず、したがつて各器官が自己に定められた機能を規則的に遂行する程度の如何によつて社會の活力もまた増減する、と書いている。器官たる個人が自己の機能を果す程度によつて社會という有機的存在の活力が左右されるとすれば、個人の努力が全體に影響するわけで、サン・シモンが個人の努力の意義を無視するものでないことは明らかである。

しからは天才人と呼ばれるような人は、文化の發展行程にいかなる役割を演ずるものであろうか。サン・シモンによれば、創造的な人物と考えられているひとびとも、實は先人が準備した業績を要約し集約したものにほかならぬ。「組織者」

のなかにつぎのような記述がある。「人間精神の歴史においては、事物の一般的進行によつて、重要な集約をなすように呼びかけられた世代や個人 (Les générations et les hommes, qui ont été appelés par la marche générale des choses à faire les résunés importants) は、同時代のひとびとや、さうして後世のひとびとの目になえ、つねに創造的性格 (Le caractère créateur) を帯びる。たとえばルッターはヨーハン・フス (Jean Huss)、ウィクリフ (Wicleff)、ヴォーダワ (Vaudois)、などの集約をしたものであるが、われわれは通常かれが宗教改革を創始 (Inventer) したものと見なしている。それと同様にもろもろの科學におりてもわれわれは、たとえば微積分の發見についてライブニッツはフェルマ (Fermat)、デカルト、カヴァリエリなどの集約をしてゐるのを見る。しかも實は人間精神の進行がほとんどずつかり準備していたことなのだが、われわれにはかれが全く創造したかのように見えるのである。同じようなことは、特殊であれ全般的であれ、とにかくすべての方面に起つた重要な一切の進歩について觀察されることができさる。「しかし、ライブニッツもルッターも先人の業績を集約しただけで、みずから付加するところはなかつたのであらうか。サン・シモンが「集約」ということばを使つてゐることは、こうした疑問をわれわれに抱かせるけれども、つぎの記述は、かれがいわんとしたところを正しく理解するために重要であらう。「完成に最後の手を加えた世代あるは人物 (La génération ou l'homme qui a mis la dernière main aux perfectionnements) が、いつも全體を創造したかのように見なされてゐる。こうした感じ方をよく知ることは、誰にもむづかしくはない。そう感じるのには或る點まで自然であり、やむをえないところがある。それは最初の判断の結果なのだ。」すなわち天才人と呼ばれるひとびとの仕事は、單なる集約ではなくして、最後に手を加えて完成せしむることである。宗教や科學の分野において天才の仕事がそれほど限られたものであるとすれば、社會體制に至つては、決して「天才人の能く」「創造」しうるところでなうことは明らかである。「ひとは社會的組織の體制を決して創造するものではない。(On ne crée point un système d'organisation sociale.)」すべて形成されてゐるところ

の、理念や關心の新しい連鎖 (Je nouvel enchainement d'idées et d'intérêts qui s'est formé) を見つけ、それを示すだけである。社會體制は一つの事實であるか、さもなければ無だ。わたしは憲法草案の基礎を述べたが、この草案を形成したのは、わたしではない。ヨーロッパの住民大衆 (La masse de la population européenne)こそ、現世紀に先だつ八世紀間にそれを形成しようと努力してきたのだ。世人がまだそれに氣づかなかつたとすれば、それは今なお残存する古い社會的建造物の正面によつて隠されているからである」と。

同様なことは、サン・シモンが書いた「人間科學に關する覺書」(Mémoire sur la science de l'homme) (一八一三年)の序文にも見えている。「もろもろの科學において最も有益な歩みは、つねに、最近なしとげられたことに直ちに接続する歩みである。文化の進歩に最も多く貢獻する科學的な企ては、つねに、天才たちのきわめて最近の業績が準備してくれた企てである。なぜなら、最も正しい理念でも、それがあまりに文化の状態よりも進みすぎていると、ほとんど物の役に立たないからだ。世人はそれについて重要な應用を行いないうちに、それを忘れてしまうものである」と。あまりにも當代の水準を抜きすぎると、その時代には受入れられない。受入れられてその時代に貢獻するためには、先人の業績から僅かばかり前進したものでなければならぬ。その意味において文化の發展に大きな飛躍はない。天才人と呼ばれるひとびとの業績も、こまかに見れば、かれに先だつひとびとの業績から一步前進したものにほかならぬ——というのがサン・シモンのいいたいところであろう。因みにここでサン・シモンが「天才人たちのきわめて最近の業績」といつている天才人とは、具體的にはヴィック・ダジール (Vicq-d'Azir)・カニス (Cabanis)・ビシャール (Bichat)・コンドルセの四人を指している。

ジョルジュ・ヴェールは「サン・シモンとその事業」(一八九四年)のなかでサン・シモンの歴史觀を批判している。

ヴェールによると、サン・シモンの考え方では歴史の發展において個人はもの數でなく、偉人の出現は重要性をもた

す、宗教改革はルッターがいなくても同じ経過をたどつたであろうし、ボナパルトやワシントンのような人物が抬頭するのを見ることは革命にとつてどうでもよいことだ<sup>11</sup>——というのである。しかし、サン・シモンは果して偉人や天才の意義をそこまで否定し去つてゐるであらうか。後述するようにコントではそこまで行つてゐるといふ見方も成立しえようが、すくなくともサン・シモンはそれほどいい切つてはいない。殊にサン・シモンは、ヴェール自身も述べてゐるように、特に政治的出来事は法則に従つて生起するもので、自然科学の場合以上に豫見が可能であると考へてゐるのであるから、政治や社會組織の分野における天才的人物の仕事と、科學・技術・藝術上の天才人の業績とを或る程度まで區別してゐたのではないかと思われる。自然科学の場合は政治的事件よりも豫見が困難であるといふのは、天才の出現によるのである。このことは、「人間科學に關する覺書」のなかで、廣義の生理學（すなわち社會科學）の一般的理論を事實の觀察にもとずけて樹立する仕事が「この科學的方面に現れるであらうところの最初の天才人」（*Le premier homme de génie qui paraîtra dans cette direction scientifique*）<sup>12</sup>に期待されてゐることによつても首肯されよう。

サン・シモンは十八世紀のエルヴェシユスのように知能平等説をとるものではなかつた。このことは、かれが一八一三年十二月の「萬有引力に關する勞作」（*Travail sur la gravitation universelle*）のなかで、「かくして現在の事情は、哲學的天才を賦與されるであらうところの最初の人物（*Le premier homme qui sera doué du génie philosophique*）に、道義上ソクラテスの觀點に立つように呼びかけてゐる」（*旁點小林*）<sup>13</sup>とゞつてゐることからも、うかがわれる。すなわち天才は天賦のものであると考へられてゐるわけである。また「藝術家・學者および産業者——對話篇」（*L'Artiste, le Savant et l'industriel, Dialogue.*）のなかでも、つぎのようなことが見える。現代の統治者たち（*les gouvernans*）は「自分らの生きてゐる時代を理解してゐない。かれらは、現代において重きをなすものは才能ある人物（*hommes de talent*）、有用なる人物だけであることを充分には考へてゐない。かれらは第一級の重要性、第一級の厚遇を享受した

らと思つてゐるが、實は自己の業績によつて學者・産業者あるいは藝術家の中に入れられるだけの値打を少しももつてゐないのだから、かれらは凡庸な人物 (des hommes médiocres) にすぎない」と。この際サン・シモンは脚注に、「藝術家といふことは、この對話篇において、全著作におけると同じく、構想力をもつ、人物 (homme à imagination) を意味する」(旁點の部分は原文イタリック) と書いている<sup>14</sup>。構想力のゆたかさも天賦の資質によると考えてゐるわけであらう。殊にサン・シモンが單なる知性と天才とを區別してゐることは、この意味において注目に値しよう。「學者の義務は、藝術家のそれに劣らず尊く且つ重い。(中略) 漠然たる知識が今日なお行使してゐる支配力を打破し、堅實な證明によつてもらもろの技法の意志や産業の考案を助け、知性・天才および道義的力が動物的な力と數的優勢とに對抗しておつめる勝利 (le triomphe de l'intelligence, du génie et de la force morale, sur la force animale et sur la supériorité numérique) を自分たちの勞作の偉大な結果および自分たちの力づよひ行動によつて確保することは、かれら學者の仕事である」(旁點小林) とここでサン・シモンが知性や天才や道義的な力が動物的な力に勝つばかりでなく、數的優勢にたいしても勝利をおさめなければならぬとしてゐることも、注意さるべきであらう。すなわち、數的にいつて優勢なものが必ずしも人類の進歩を促すのでなく、數的に劣勢な知性や天才や道義的な力の方が重んじらるべき場合のあることを、かれはここで主張してゐるわけである。そうするとサン・シモンは、やはり一種の少數精英主義を是認してゐたと考えなければならぬ。

しかし、サン・シモンは天才の社會的被制約性をも強調してゐる。かれによれば「藝術において、科學に於いて、また産業において傑出した人物は、いつも、社會の最低の諸階級から出たひとびとである。」(De tout temps, ce sont les hommes sortis des dernières classes classes de la société qui se sont distingués dans les arts, dans les sciences et dans l'industrie.) もまた、このサン・シモンのことは、かれが他の箇所でも傑出した人物としてあげてゐるひと

との實際の出自に反する場合がすくなくない。けれどもサン・シモンがここで主張しようとしているのは、古代史や大部分の近代史が生誕による貴族(Aristocratie de naissance)の記録だけしか提供せず、したがって長々しい戦争物語にほかならず、しかも今日において諸國民は遂に平和の時代に入り、「科學・産業および藝術の歴史、すなわち民衆の歴史(Histoire du peuple)が決定的に始まつた」ということである。歴史の主體は有閑・上流の社會でなく、實際に生産に従事する民衆である。藝術の發展も、産業の發展を前提としてはじめて行われる。「中世の大部分のあいだは、何ものもひとびとの長さ眠りを呼びさまさなかつた。侵入も虐殺も火災も、ひとびとの天才(leur génie)をめぐらすことはできなかつた。こうした勝利は、産業と平和の再生(La renaissance)をまつてはじめて得らるべきであつた。ひとびとは十五世紀に至つて、メディチ家の保護によつて生氣をとりもどしたが、このメディチ家は廣範圍にわたる商業に従事してゐたのである。藝術の第一の搖籃たるフィレンツェ(Florence)は、工場と商業との町であつた。繪畫のあらゆる天才(Bout le génie de la peinture)が息づき、あらゆる民族の賞讃が集中するあの壯麗なもろもろの繪畫を、われわれは實に産業に負うてゐるのである。ヨーロッパの北部において繪畫の最初の派たるフラマン派はあれほど有名になつたが、この派はヨーロッパの都市のうちでは人口に比して最も有力な産業的企業を營んでゐたアントワープ(Anvers)において創始された。見たまえ、大衆(La masse)があれほど久しく壓制的にして不道徳な制度の犠牲となつてゐたフランスでは、藝術がいかに遅れて發達したかを。見たまえ、半世紀このかた藝術がどんな躍進をとげたかを！」このようにして、藝術の發展は産業・政治の状態に制約される。いかなる天才人といえども、こうした制約を超えてすぐれた業績をあげることではできなからうである。「藝術家はやさしい情緒を必要とする。したがつて、かれに最も適するスペクタクルは、勤勞の幸福(bonheur du travail)のそれであり、平和のそれである。藝術にとつての災禍は、無爲徒食と専制政治である。藝術の支柱、藝術の生命は産業と自由だ。ところで、できるだけ簡單ないい方をしよう。産業とは何か。民衆だ。(C'est le

people.) 自由とは何か。産業の物的および心的な、自由な發展である。生産である。(c'est la production) またサン・シモンによれば、「藝術が精神の運動 (le mouvement des esprits) に従つてゐるとき、藝術が大いなる心的活動 (une grande action morale) に關與してゐるとき、そのときには藝術は當然、民衆 (le peuple) のうちに保護を見出す。十五世紀すなわち現在の事態を用意した偉大なる宗教的・科學的運動の時代において藝術はそうであつたし、さらに、一般的な不如意により、またあまりにも永く押しひしがれていた諸力の爆發により生みだされた解體の傾向に藝術が従い、その傾向を藝術が支持した前世紀においても、そうであつた。しかし藝術が、もはや作用すべき或は支持すべき活動を見出さないようになり、その時代の相貌を把握せんとしても把握しえなくなり、いかなる全體的情感の自由な發現をも見出しえなくなると、藝術というものは自己を支持する柱を確實にもつてゐるときだけしか前方に進出することを肯んじないものだから、ふたたび藝術は權力に身をゆだねる。そうなると忽ちその場かぎりの詩句や彫像や記念碑が現れてくる。

(中略) しかし、こうした一時的の作品や、それらの作品を生ぜしむる偽りの方向のただ中にあると、藝術家は自分たちが本分を果してゐないこと、自分たちの貴く高い使命を遂行してゐないことを感じる。すなわち、そうした使命によつて課せられてゐる義務を自覺する。しかしかれらは、自分たちのうちにあつてまだ一個の感情にしかすぎないところのものが一個の理念となるまで待つてゐる。この理念を發表しようではないか。そうすればわれわれは、藝術家がかれらの當然の保護者たる民衆に、産業に復歸するのを見るであらう。産業こそ藝術の當然の保護者であり、産業のみが藝術家に獨立を許し、かれらの正當なる價值でかれらを評價し、かれらを踏みつけにせず繁榮させる。そうなると藝術家は、かれらが時代とともに前進するようになり、かれらがそこばくのひとびとのためでなく大衆 (les masses) のためにはたらいてゐたときに、また社會の案内人であり心理的表現であつたときに、常にかれらがついてゐた重要性をとりもどすのを、われわれは見るであらう。」

サン・シモン天才論のあらまは以上に掲載したところによつてうかがわれるであろう。それでは、かれの歴史觀に大きな影響を興えたコンドルセの天才論はいかなるものであつたか。その天才論をサン・シモンのそれと比較するとき、いかなる繼承と發展の關係が跡づけられるか。

### 三

コンドルセの「人間精神進歩の史的繪圖素描」(Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain, 1754)によると、およそ進歩には二つの種類がある。「弓の發明は天才人の仕事であり、一つの言語の形成はその社會全體の仕事であつた。(L'invention de l'arc avait été l'ouvrage d'un homme de génie : la formation d'une langue fut celui de la société entière.)」これら二種の進歩はひとしく人類に所屬する。一方は比較的急速で、これは新しい工夫の成果であり、自然によつてめぐまれたひとびとが形成する力をもつところのものである。それはかれらの冥想と努力との報しである。(L'un, plus rapide, est le fruit des combinaisons nouvelles que les hommes favorisés de la nature ont le pouvoir de former ; il est le prix de leurs méditations et de leurs efforts) 他方は比較的緩慢でこれは結合してゐるひとびとの誰にもできる省察や觀察から、またそれどころか、かれらが共同生活の經過中に養つた慣習からさへも、生れてくる。<sup>18</sup>「このようにコンドルセは天才の役割を高く評價してゐるのであつて、そこには天才人すなわち天賦の資質にめぐまれたひとびとが、文化の發展および社會の進歩の動因の一つとして明確に謳われている。その意味において、かれの天才論は天才動因論に屬する一面をもつといわなければならぬ。さればこそ、アレクサンドロス大王が東方遠征の途上、師アリストテレスに送つたカルデアに關する報告は、天文学の進歩を促進したが、このギリシア天文学の最も輝かしい業績はヒッパルコス(Hipparque)の天才による、とされるのである。しかも、天才による「これらの

發見、これらの業績は、いわば一つの科學の全貌を一變するものであつて、こうした發見・業績は、幾何學や力學に於いてアルキメデスののちにそうであるように、天文學に於いてはピタゴラスののちに見出されなす」(…après lui, dans l'astronomie, comme après Archimède dans la géométrie et dans la mécanique, on ne trouve plus de ces découvertes, de ces travaux, qui changent, en quelque sorte, la face entière d'une science…)と云はれつゝ、もちろんコンドルセはその場合、こうした天才人の死後は人間精神の進歩が停止する、と云うのではない。天才人は出ななくとも、「それらの科學は、なほ永く改善され (se perfectionner)」、擴張され (s'étendre)」、すくなくとも細部の眞理 (des vérités de détail) によつて豊富にされる」とつけ加えて云うことを忘れてはならぬ。しかし、コンドルセはデカルトやペイコンやライブニッツの天才をきわめて高く評價してゐる。これらの「非凡の人物」(hommes extraordinaires)の影響は全人類にひろがるのであるが、しかし、こうした非凡の人物を生むものは「偶然」(Le hasard)である、ともコンドルセは書いてゐる。それでは「これらの非凡の人物の若干をその國民の内部に生れさせた偶然」(…au hasard qui a fait naître dans son sein quelques-uns de ces hommes extraordinaires…)とは何か。それは、コンドルセが深く傾倒したといわれるテュルム「環境の偶然」(Le hasard des circonstances)を指すのであろうか。それとも同じテュルムが「自然はあらゆる時代に、またあらゆる場所に、ほとんどひとしい間隔を置いて一定數の天才を蒔く」といつた意味での偶然であらうか。わたくしはそれが何を指すかを明確に決しえないけれども、こうした表現のうちにもサン・シモンの天才論とコンドルセのそれとの相違は看取されるであらう。

さらにコンドルセのことばのなかには、かれがまだ個人主義的な社會觀を脱し切れずにいたことをうかがわせるものがある。コンドルセによれば、人間の諸能力の發達を、各個人に共通な點に着眼して見ると、一般的事實と恒久的法則とが把握される。もし、こうした一般的事實と恒久的法則を觀察し認識することのみに止まるならば、その學問は形而上學と

呼ばれることになる。しかし、この同じ發達をその結果に即して考え、一定の空間に同時に存在するものも個人の即して考察し、また世代から世代へと跡づけるならば、そこに人間精神の進歩の繪圖が提示される——というのである。<sup>22</sup>すなわちコンドルセの「人間精神の進歩」とは、個人の精神の發達の總計的な結果にほかならぬ。そこには個人を社會の本質と見る啓蒙思想の個人主義的な社會觀が根強く存在している。社會が個人を創るという集團主義的な社會觀へは大きな距離がある。かれの天才論が天才動因論に屬する一面をもつ事實とともに、こうしたかれの個人主義的な社會觀もまた、われわれの記憶すべきことであろう。

けれどもコンドルセはすでに、天才の仕事を弓の發明などに限つていた。これに對して言語の發達はそれぞれの社會全體の業績であるとされている。その意味において、かれの天才論は天才動因論の一面と同時に、天才非動因論の一面をも含むものであつた。また、かれの社會觀は個人主義に立脚してはいたが、個人の社會的被制的性もしばしば強調されている。殊にかれが人間精神の進歩を歴史的發展の一大法則として高唱したことがサン・シモンやコントに深い感銘を與えた事實は、すでに多くのひとびとによつて指摘されたところである。サン・シモンはこの進歩の法則をさらに一段と強調し、コンドルセの示唆した歴史の法則科學化をさらに徹底させようとしたものにほかならぬ。こうしたサン・シモンの企圖が天才論史上においていかなる地位をかれに歸せしむるかを考えるためには、コントの天才論をかえりみなければなる

450

#### 四

オーギュスト・コントとサン・シモンとの關係については、本田喜代治氏の「コント研究」にすぐれた記述がある。サン・シモンを知つたのちのコントの「生涯をあまりに多くサン・シモンとの關係といふ偶然的な事件に歸せしめることは

避けなければならぬ。コントの社會的關心はその前からすでに表はれてをり、今もなほ周圍の事情がこれを強要してゐた。尤も、後年コント自身が甚しく強調したほどそれほど彼に對するサン・シモンの影響が微小であつたと考へるならば、これまた早計の誇りを免れない。後者の前者に對する影響は確かに相當に大きかつた。「(三〇頁)サン・シモンに會う前からコントに芽はえていた思想がサン・シモンのそれに類似してゐたことは、「兩者の共通の友人である某が、彼等の思想の類似に驚いて二人を結びつけようとした」(三一頁)ほどである。サン・シモンの協働者となつたのち、「コントの思想や時には彼の言葉そのままが勝手にサン・シモンの論文中に採り入れられた。コントにとつてはそんなことが面白くなかつたに相違ない。」(三五頁)「初め、コントは、サン・シモンを愛し、これを尊敬して自ら「サン・シモン氏の弟子」と稱したほどであり、その影響は彼の生活の隨處に見られた。(中略)さういふ事情にもかかはらず、彼は、最初からサン・シモンに對し、自分の獨創性を自負する氣持を禁じ得なかつた。」(三六頁)——と本田氏は述べていられる。したがつて、コントの後年の著述のなかにサン・シモンと類似の思想やことばが見出されても、それをもつて直ちにコントがサン・シモンから學んだものであると斷定することは危険である。こうした關係を念頭に置きつつ、コントの天才論を見てゆかねばならぬ。

コントの天才觀を典型的に示すものとして常に引用されるのは、「實證哲學講義」第四卷第四九課のつぎのことばである。「各時代における、いやそれどころか各世代における偉大なる進歩は、必然的に常にその時代や世代のすぐ前の狀態の結果として出てくるものである。これらの進歩は通常、あまりにも専ら天才人に歸せられているが、天才人は本質的には單に、すでに豫定された一つの運動の固有の器官として現れてきたにすぎないのであつて、その運動はそうした天才人がいなかつたとしても、他の出口をみずから切りひらいていつたであらう。」(…les hommes de génie, auxquels ils sont, d'ordinaire, trop exclusivement attribués, ne se présentaient essentiellement simultanément la même

grande découverte, qui n'a du cependant avoir qu'un seul organe.) 人類の發展 (evolution) のつかなる部分もすべて、根本においてはこうした事實に本質的に類似した觀察をわれわれに與えるのであつて、ただそれが一段と複雑であり、したがつてわれわれの目につきにくいだけのことである、とコントはいう。このようなコントの見解は第六卷第五六課にも見える。すなわちルネッサンスのかた古代の幾何學が次第に應用されることによつてケプラーが天體の運動の法則を提唱したが、かれは萬有引力の理論にまでは到達しえなかつた。しかし、「これだけの基礎ができていれば、必然的にこの一般的法則にみちびいたであらう。よしやニュートンがこれを發見しなかつたとしても、その發見は、たとえばシヤック・ベルヌーイの目のがれることはなかつたであらう。」(d'après une telle base, il amenait nécessairement à cette loi générale, dont l'invention, ainsi préparée, n'eût pas échappé sans doute, à Jacques Bernoulli, par exemple, si Newton l'eût manqué.) このいは、サン・シモンが「道具」と呼んだものが「器官」として換えられてくる。

「器官」という表現がサン・シモンにおいてもすでに用いられてゐることは先に觸れた。サン・シモンによると、生理學は有機的存在 (les êtres organisés) のなかで行われる一切の事實をその研究領域とするものであり、單に解剖學や化學の扶けをかりてわれわれの組織の内部を探索するばかりでなく、さらに高い段階の問題をも考慮すべきである。サン・シモンは通常の意味におけるものを特殊生理學 (la physiologie spéciale) と呼び、廣義の生理學を一般生理學 (la physiologie générale) と名づけよう。この一般生理學は社會的身體 (le corps social) の有機的機能 (les fonctions organiques) を研究すべきであつて、個人はこの社會的身體のもららる「器官」(des organes) にほかならぬ。なぜなら社會は「生體の單なる集合」(une simple agglomération d'êtres vivants) では決つてなく、「眞の有機的機械」(une véritable machine organisée) である。社會を個人の集合と考え、個人の行動は一切の終局目的 (but final) と

は無關係のものを見なし、個々の意志が任意にはたらいて個人の行動を規定するとするのは誤りで、社會という有機的機械に於ては、すべての部分はそれぞれがつた仕方であつて全體の進行 (marche de l'ensemble) に貢献するのである。人間の結合 (réunion)こそ本當の存在を構成するのであつて、社會の各器官が自己に定められた機能を規則的に遂行する程度の如何によつて、社會もまた活力に増減を生ずる。かくしてわれわれが社會を「一つの生きた存在」(un être animé)として研究するならば、社會的身體はその誕生時、およびその生長のそれぞれの時期 (époque) に於いて或る様式の活動力 (un mode de vitalité) を示す。かくして文化の歴史は人類の生涯の歴史であり、それはその時代 (âge) の生理學にほかならぬ——とサン・シモンは述べている。かれの如く一般生理學が今日の社會科學を意味したことは、明らかである。そして、コントの「器官」とサン・シモンのそれとがほとんど同じような意味で使われていることも明白であろう。

またコントが天才人の功績を全く無視するものでなかつたことも、忘れてはなるまい。「偉大なるケプラーの天才に負える探求」(Investigation due au génie du grand Kepler)、「偉大なるライプニッツ」(le grand Leibnitz)、「ライプニッツの感嘆すべき創意」(l'admirable invention de Leibnitz)、「不滅のラングランジュ」(l'immortel Lagrange)、「ライプニッツの「科學的にして同時に哲學的な天才」(le génie, à la fois scientifique et philosophique)」、「ガルの天才による輝かしい生物學的研究」(la lumineuse élaboration biologique due au génie de Gall)、「デカルトやスイコンの記念すべき最初の衝力」(la mémorable impulsion initiale de Descartes et de Bacon)、「ヴィエートの獨創的天才による代數の普遍化」(généralisation de l'algèbre, due au génie original de Viète)と云ふような表現は、きつぱ多く見出される。このようにコントが天才の功績を過小評價するものでなかつたことは、往々にして世の論者たちが忘れてちな事實である。また、かれが「その運動はそうした天才人がいなかつたとしても、他の出口をみずから切りひらいていつたであろう」という場合にも、そのように切りひらいてゆく他のひとびとは、やはり「すぐれた精神の持主」であ

るといわれるだけで、それらのひとびとを背後から押し進める大衆の存在には言及されていない。

このようにコントの天才論もまた、集團主義的な社會觀・歴史觀の立場から見れば、なお個人主義的な色彩を残しているといわれるであろうが、しかし、サン・シモンの天才論に比すれば確かに集團主義的方向に前進している。各時代および各世代における進歩がそのすぐ前の状態に接續することは、サン・シモンも指摘していたけれども、コントにおいてはその必然性が一段と科學的に理論化されている。サン・シモンでは「集約」といつたり、「最後に手を加える」といつたりして些か統一を欠いていたが、コントでは天才人は「豫定された一つの運動の固有の器官」として明瞭に規定されてくる。しかもその運動は、「そうした天才人がいなかったとしても、他の出口をみずから切りひらいていつたであろう」と斷言される。

## 五

以上、サン・シモンの天才論をかえりみ、これをコンドルセおよびコントの天才論と比較したのであるが、サン・シモンの天才論は、集團主義的歴史觀の立場から見て、コンドルセよりも前進し、コントよりは遅れている。またコンドルセが天才動因論の一面を残していたのにたいして、サン・シモンは非動因論を明瞭に誦い出している。しかし、サン・シモンにおいては、先に述べたように、政治や社會組織の分野と科學・技術・藝術の分野とにおいて天才の役割と意義とを區別して考えていたと見られるふしがある。ところが、コントになると、「人類の發展のいかなる部分もすべて」根本においては個人が一つの豫定された運動の器官にほかならぬことを示している、と主張される。

それでは、サン・シモンはいかにしてこのような天才論に到達しえたのであろうか。かれがコンドルセよりもさらに歩を進めえたのは、果していかなる事情によると考うべきか。それはいわゆるサン・シモンの「社會主義」にもとずくの

であろうか。それがサン・シモンであると否とを問わず、とにかくこうした「社會主義」を抱く人物の出現をまたなければ、かくのごとき天才論は生れえなかつたのであろうか。

もしサン・シモンの「社會主義」が非動因論的・集團主義的天才論への徹底のために必須の前提条件であるとすれば、われわれはコントの天才論がサン・シモンのそれよりも一段とそうした方向に前進していた事實を説明することができないであろう。なぜなら、周知のごとくコントの社會思想は、いわゆるサン・シモンの「社會主義」を一段と深化・徹底させたものではなく、むしろそれよりも後退したものにすぎなかつたからである。このように考えてみると、われわれは、サン・シモンやコントを驅つてあのような天才論を主張せしめた直接の推進力が、いわゆるサン・シモンの「社會主義」を含むところの、しかしそれのみには限定されなかつたところの、廣い意味における社會改革の意圖であつたというほかはあるまい。もちろんこうした意圖の生れるゆえんは、現實の市民社會の矛盾・不合理にある。しかし、この矛盾・不合理をどの程度まで認識し、どの程度まで是正せんとするかは、ひとによつて異なる。それにしてもサン・シモンとコントはひとしく究極において「市民層のイデオログ」であつたといわれる場合、それは市民層から生れたイデオログという意味ではなくして、市民層のためのイデオログであつたことを意味していることはいうまでもない。そのような限界はあつたにもせよ、とにかく社會改革の意圖のもとに「進歩」が人類發展の永遠の鐵則として前提された。歴史を法則科學として確立しようとする企ての背後には、こうした意圖が横たわつていた。市民層から生れたイデオロギーは、市民層のためのイデオロギーだけに止まらず、市民層のためでないイデオロギーをも含んでいた。いわゆるブルジョワ・イデオログたるサン・シモンによつてコンドルセの天才論が變改された事實は、われわれをしてブルジョワジーから生れたイデオロギーの多面性を考えさせ、ひいてこのような多面的イデオロギーを生む人間の、自己の利益に制約される面とそうした制約を超える面との關係の問題を考えさせる。

- 註 1 「西洋史學」Ⅱ所載拙稿「十八世紀フランスにおける天才論の性格」三一頁。なお拙稿「ヴォーレンの天才論と社會主義」(史淵第五四輯)参照。
- 2 かへくえびとてん、わさくは天才非動因論を總論として、と斷定してゐるわけはなす。
- 3 宮川實編「空想的社會主義と科學的共產主義」(青木文庫)六一頁。
- 4 Oeuvres de Saint-Simon & Enfantin (Paris 1875), XX, 118—119.
- 5 Ibid., 119.
- 6 Ibid., 177—179.
- 7 Ibid., 179.
- 8 Ibid., 179—180.
- 9 Enfantin & Saint-Simon : Science de l'homme, physiologie religieuse (Paris 1868), 241.
- 10 Ibid., 242—243.
- 11 G. Weil : Saint-Simon et son oeuvre (Paris 1894) 235.
- 12 Science de l'homme, 257.
- 13 Ibid., 436.
- 14 Oeuvres de Saint-Simon et Enfantin, XXIX, 204.
- 15 Ibid., 216—217.
- 16 Ibid., 218.
- 17 Ibid., 222—225.
- 18 Condorcet, Esquisses etc. (Texte revue et présenté par O. H. Prior), 16.
- 19 Ibid., 66.
- 20 Ibid., 141. なおロマンヌルサビのうすは十代田謙博士の「啓蒙史學の研究」第一節概論第二六一—二八二頁で詳しく述べた叙述を参照。
- 21 出口勇藏「經濟學と歴史意識」一八六一—一八七頁。
- 22 Condor et, 2.
- 23 A. Comte : Cours de Philosophie Positive (Paris 1908 : édition identique à la première, parue au commencement de Juillet 1830), IV, 196.
- 24 本田喜代治「ロマンヌ研究」二一七頁。  
(一九五三・五・五)

## Saint-Simon's View on Genius

by E. Kobayashi

Though Saint-Simon's interpretation of history was discussed by many scholars, his view on genius (and men of genius) has not been studied as a special subject. I intend to study the history of theories on genius as a part of history of historical theories. Saint-Simon was influenced by Condorcet, but stood nearer to collectivism than the latter. Comte was nearer to collectivism than Saint-Simon. Why? Was Saint-Simon led to such a view on genius by his so-called socialism? I think not so, because Comte was less "socialistic" in Saint-Simon's sense, yet was more collectivistic. That which led Saint-Simon and Comte to the collectivistic view of genius was their intention of social reorganization in broader sense.

Saint-Simon is said to have been a bourgeois ideologist in spite of his "socialism." But we must not forget that the ideology of bourgeoisie has two sides: one is the ideology for the benefit of bourgeoisie, the other the ideology not for the benefit of bourgeoisie. Saint-Simon's intention of social reorganization belongs to the latter side of it.